論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨の公表
学位規則第８条に基づき、論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

フリガナ 氏名（姓、名）	ミヤモト　サヨ 宮本　紗代		授与番号　甲 1677 号
学 位 の 種 類	博士(　文学　)	授与年月日	2023 年　3 月　31 日
学位授与の要件	本学学位規程第 18 条第 1 項該当者　　[学位規則第 4 条第 1 項]		
博士論文の題名	『神仙傳』と六朝までの神仙・神人・眞人・仙人像 ―超自然現象を中心として―		
審　査　委　員	（主査）石井　真美子 （　立命館大学文学部教授　）	大形　徹 （立命館大学衣笠総合研究機構教授）	
	萩原　正樹 （　立命館大学文学部教授　）		

論文内容の要旨

【論文の構成】

本論文は、序と結論および本論全三章で構成される。各章の概要は以下のとおりである。第一章「『神仙伝』の神仙・神人・真人・仙人という呼称の違いについて」では、六朝時代の葛洪が書いたと言われる『神仙伝』における「神仙」「神人」「真人」「仙人」と呼ばれる存在について検討し、それぞれの特徴を明らかにした。第二章「『神仙伝』の中の超自然現象について―神仙・神人・真人・仙人という呼称の対比―」では、各々の呼称について、仙術（申請者は「超自然現象」とする）の異同について考察した。第三章「『神仙伝』と六朝までの神仙・神人・真人・仙人像の対比―超自然現象を中心として―」では、漢代までの書と六朝の書に見られる各呼称の特徴について検討し、『神仙伝』との影響関係について考察、さらに『神仙伝』に登場する「天仙」「地仙」「尸解仙」という分類と上記の各呼称との関係に言及した。「結論」では、第一章～第三章までの内容を総括し、各呼称の違いを述べ、かつ六朝時代において用例が変化したこと等について附言する。

【論文内容の要旨】

本論文は、六朝時代、道教思想の基礎を築いた葛洪が書いたと言われる『神仙伝』に見られる、人間を超えた存在を指す「神仙」「神人」「真人」「仙人」という呼称に焦点を当て、それらが指す存在に違いがあるのかを考証したものである。まずは第一章で、『神仙伝』においてそれらの呼称がどのような存在に対しどのような場面で使用されているのか、第二章では彼らが起こした超自然現象を分類してそれぞれ統計し、例を挙げて相違が見られるのかを考察した。また同時に、呼称された存在の出身地が明記されているのかに注目した。その理由として、出身地が書かれているということが元来人間であった可能性を示唆し、つまり人間がなれる存在であるかどうかを考える目安としている。その結果、「神仙」は主に具体的な個人を指さない呼称で「神人」・「仙人」を包括し、「神人」は人間がなれない存在、「真人」は人間がなれるが簡単にはなれない存在で、かつ道教との関わりがより強く、「仙人」は人間がなれる存在で、起こす超自然現象にも制限があるという特徴を導き出し、各呼称が指す存在は同一視できないことを明らかにした。

第三章では漢代までの書と六朝時代の書に登場する各呼称の特徴を列挙し、その結果、漢代までの書における各呼称の特徴は概ね『神仙伝』と同じであり、著者がそれまでの書におけるイメージを継承して『神仙伝』を成したことを明らかにした。また、『神仙伝』に見られる「天仙」「地仙」「尸解仙」という、分類が異なり地位の高低がある呼称について、漢代までの書には見られないが同じ葛洪の著書『抱朴子』には登場しており、葛洪が

	作り出した仕組みである可能性を指摘した。また、不老不死という超自然現象について考察し、先秦から漢代にかけて、遠い山海にある仙境にいる仙人から薬を得て不死になるという考え方から、自分自身が仙人になり不死になるという思想に変化した過程を明らかにした。最後に、六朝時代では「神仙」「真人」「仙人」が人物の風貌を喩える美称として使用される例が見られるようになり、人間がなれる可能性のある身近な存在というイメージが広がったこと、同様の例が「神人」には無く、この点からも「神人」は人間がなれないものと考えられていたことが窺えるとした。
論文審査の結果の要旨	【論文の特徴】 本論文では、これまで古代中国の神仙思想を研究する上で漠然と同一視されてきた「神仙」「神人」「真人」「仙人」という呼称が指す存在について、『神仙伝』を中心として漢代から六朝時代までの書の記述を逐一検証し、共通点と相違点が明らかにされている。検証の結果、著者が、漢代までの書に見える各呼称のイメージを参考し、概ね継承していることがわかった。加えて、『神仙伝』では「天仙」「地仙」「尸解仙」という分類の異なる呼称が用いられており、それらは人がなれる存在であって、著者の仙人になりたいという願望が反映されたものであることをより明確に示すこととなった。 【論文の評価】 本論文で高く評価すべき点は、『神仙伝』を含め漢代から六朝の書までを網羅し、「神仙」「神人」「真人」「仙人」の用例を一つ一つ精緻に検討して、それぞれの特徴と相違点を明らかにした点である。これは基礎的なことでありながらこれまでされてこなかった研究であり、今後、漢代から六朝にかけての神仙思想および道教における世界観が形成されてゆく過程を考える上で大いに参照されるべきものである。同時に、それぞれの呼称のイメージと世界観が『抱朴子』と合致する部分が多く、著者とされる葛洪の思想を反映している書と捉えることができることを改めて証明した。したがって、この論文は従来『抱朴子』を中心として論じられてきた葛洪の思想研究にも寄与するものである。 一方で、『神仙伝』のテキストの問題についての考察が先行研究に頼り簡略であったこと、検証する書が年代順ではなく構成がややわかりにくかったこと、資料の書き下し文の誤り等が指摘された。これに対し申請者は真摯に回答し、不備な点について改善し研鑽を積んでいきたいと述べ、今後の展望を示すことができた。また、これらの問題点が、本論文全体の価値をそこなうものではない。 以上、公開審査とそれを踏まえた審査委員会判定会議の議論により、審査委員会は本論文が本研究科の博士学位論文審査基準を満たしており、博士学位を授与するに相応しい水準に達しているという判断で一致した。
試験または学力確認の結果の要旨	本論文の公開審査は、2023 年 1 月 13 日（金）16 時 30 分から 18 時 00 分まで、衣笠キャンパス末川記念会館第三会議室で行われた。 審査委員会は、公開審査において本論文の主要分野である中国古代思想について、申請者の先秦から六朝までの思想史、特に神仙思想に関わる知識について試問し、十分な回答を得ることができた。また、本学大学院文学研究科人文学専攻博士課程後期課程の在籍期間中における、「京都・ソウル・台北東アジア次世代フォーラム」（2017 年度）「京都・ソウル東アジア次世代フォーラム」（2018 年度）や中国芸文研究会（2017 年、2019 年、2022 年）での発表および公刊論文などの様々な研究活動の学問的意義についても質疑応答を実施した。さらに、申請者からは本論文の研究をふまえての今後の展望と研究計画も話された。それらを通じて申請者が博士学位に相応しい能力を有することを確認した。 したがって、本学学位規程第 18 条第 1 項に基づいて、博士（文学 立命館大学）の学位を授与することが適当であると判断する。